

41375

教科書文庫

4
810
31-1932
2000302753

200030
2753

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

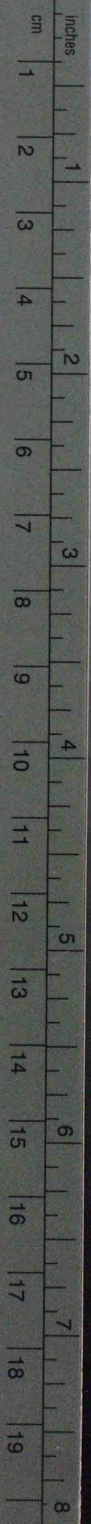


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
31-1932
2000302753

尋常 小學 國語讀本 卷六

文部省



教科書文庫

4

810

31-1932

2000302753

資料室

3759
Mok



尋常
小學

國語讀本

卷六

文部省

広島大学図書

2000302753



もくろく

第一	俵の山	一	第十四	冬の夜	四十八
第二	日本の高山	四	第十五	萬じゆの姫	五十
第三	ヤクワントテツビン	九	第十六	磁石	六十四
第四	きのこ取	十四	第十七	けんやくと義捐	六十六
第五	海	十九	第十八	賀茂川	六十九
	一 しけ		第十九	モスリン	七十四
	二 なぎ		第二十	氷すべり	七十七
第六	くりから谷	二十二	第二十一	神風	七十九
第七	霜	二十六	第二十二	象	八十五
第八	虎と蟻	二十七	第二十三	千早城	九十
第九	町ノ朝	三十一	第二十四	記念の木	九十八
第十	弓流し	三十四	第二十五	芽	百
第十一	入營した兄から	三十八	第二十六	伊勢參宮	百
第十二	笑ひ話	四十三		一 入營中の兄へ	百三
第十三	鮭	四十五		二 父から	百四



第一 俵の山

去俵

飯

「今年はほんたうにほう年だ。今の分では
 去年より七八俵よけいに取れさうだ。
 さうです。新田が大へんよく出来ました。
 来年もやはりあの稲を作りませう。」
 朝飯の時こんな話が出ました。今日はうち
 の者がみんなたんぼへ稲こきに行きまし
 た。おるす居はおぢいさんと私だけです。

第一 俵の山

一

卵

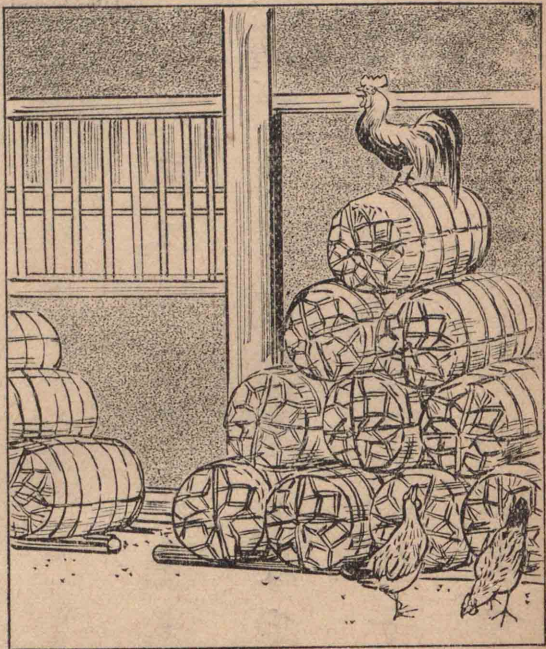
おぢいさんが庭にほしてあるもみをかへ
していらつしやると、卵買が来て、卵を七つ
買つて行きました。

九 俵

今どこのうちへ行つて見ても、俵の山が出
来てゐます。うちでも土間に丸太を置いて、
其の上につんであります。一番下は四俵、一
番上は一俵で、一山は十俵づつです。

昨日までに二山出来て、もう三つ目の山が

湯



来上りませう。

私がたんぼへお湯を持つて行つてくると、
おぢいさんが庭で腰をのばして、

出来かゝつてゐま
す。今日庭にほして
あるもみをすつて、
俵に入れてつんだ
ら、三つ目の山は出

拾

「もうお晝かな。とおつしやいました。土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、俵の山へ上つてと きを作りました。

第二 日本の高山

山 寒晩

「朝晩めつきり寒くなつた。高い山はもう雪だらう。にいさん、富士山はまつ白でせうね。」

内

高

新

「さうさ、中ほどまで降つてゐるかも知れない。何しろ一万二千五百尺もあつて、内地第一の高山だから。」

「それでは日本一の高山は。」

「^{たいわん}臺灣の新高山さ。これは一万三千尺からある。臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、それでも此の山には、時に雪を見ることがあるといふことだ。」

次



新高山

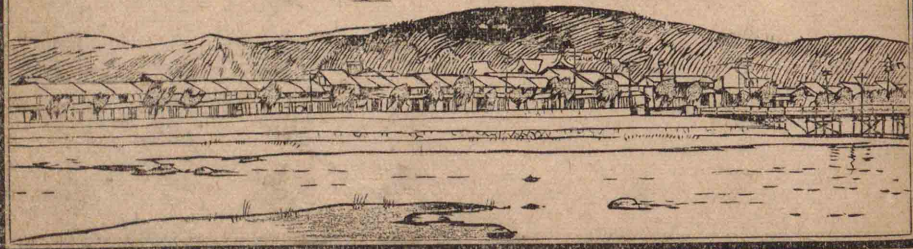
一番は新高山、二番は富士山、三番目は、
 いや、二番も三番も臺灣にある。富士山は六番目だ。
 富士山の次は、
 内地では甲斐かひの白根で、
 一万五百尺。

以外

世界

其の次は。
 信州しんしゅうの槍岳やりがたけや赤石山で、どれも
 一万尺以上ある。
 外國には、新高山より、もつと高い山がありますか。
 印度いんどのヒマラヤ山は世界一で、
 たしか三万尺近いとおぼえて
 る。しかし三郎、高い山がかな

東山



都

岡

らず名高い山だとはかぎらない。奈良の春ながら日山がや三笠山みは千尺そこかくだが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山にしてもさうだ。

ふとん着て、ねたるすがたや東山。

で、先づ高い岡だと思へばよい。」

高く高くて名高いのは、どの山ですか。」

それは富士山さ。」

金

銅仲

指

第三 ヤクワントテツビン

或晩人がネシヅマツテカラ、金物屋ノ店デ、ヤクワントテツビンガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。先ヅヤクワンガ言ヒマスニハ、

「金ニハイロく、アリマスガ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。」

金ヤ銀ハ美シクテ、オアシニナツタリ、指

安

ワニナツタリ、其ノ外イロくナカザリ
物ニナリマスガ、トチラモタクサンアリ
マセンカラ、ネダンモ高ウゴザイマス。銅
ハソレニヒキカヘテ、金ヤ銀ヨリモタク
サンアリマスカラ、シタガツテネダンモ
安ウゴザイマス。ソレデ、オアシニナルコ
トモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マ
ス。金ダラヒニモナレバ、私ノヤウナヤク

鐵(鉄)

ワンニモナリマス。シテミレバ銅ホド役
ニ立ツ物ハアリマス。マイ。
テツピンハ

ナルホド、銅ハタクサンアツテ、役ニモ立
チマセウガ、モツトタクサンアツテ、モツ
ト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。
飯ヲタクカマモ、物ヲニルナベモ、湯ヲワ
カス私モ、私ノ乗ルゴトクモ鐵デス。其ノ

釘 艦

之

外、釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワ
 ン車軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガ
 ナケレバ造ルコトガ出來マセン。今デハ
 鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセンガ、
 人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。
 ヤクワンハ之ヲ聞イテ、
 「ソレデモ鐵ハチキニサビテ、赤クナルデ
 ハアリマセンカ。」

使

毒

ト言ヒマシタ。其ノ時鐵ビンハ
 「私タチノサビルノハ人が使ハナイカラ
 デス。モシセイ出シテ使ツテクレサヘス
 レバ、イツデモ光ツテキマス。銅ハ人ニ使
 ハレテキテモ、時々青イ物ヲ出シマス。ア
 レガヤハリサビデス。シカモ其ノサビハ
 大ソウ毒ナ物デス。」
 ト言ツテ、中々マケマセンデシタ。

第四 きのこと取

二三日降りつづいた雨がからりとはれたので、昨日のお晝すぎにいさんときのこ取に行きました。松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、

「そんな大きな枝を。」

と、にいさんに注意されました。

僕がぐみをたべてゐる間に、にいさんは初

折 意 初

紅茸

茸を五六本取つたやうでした。僕が紅色のきれいなきのこを取つて、にいさんに見せましたら、

「あゝ、それは紅茸だ。毒だよ。其の手でぐみをたべてはいけない。」

と、にいさんが言ひました。僕はびつくりして、ぐみも紅茸も地面へなげつけました。それからにいさんと、さふ木林へはいつて、

じめくくした落葉をふんで、ねずみ茸を少し取りました。

だんくく上つて行くと、

山の中でも、三軒家でも、

住めば都よ、わが里よ。

木びきの力藏さんがうたをうたひながら、大きなのこぎりで板をひいてゐました。何の木か、おがくづが大そうよくにほつてゐ

ました。にいさんが

「今日は、

と言つて、

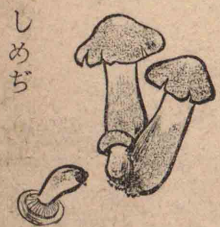
「此の近くに、しめぢの出る所

はありますか。」

とたづねますと、

「さあ、まだ早いかも知れない

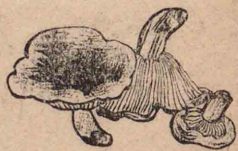
がね。」



しめぢ



ねずみ茸



初茸

教

と言つて、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。

列

禮(礼)

行つて見ますと、なるほど少し早すぎましたが、それでも、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。ふまないやうに注意して、かご一ぱい取つて歸りました。歸りがけに、力藏さんにお禮を言ひましたら、

「雨降つたら、又お出で。」

と言ひました。

第五 海

一 しけ

鉛次 濱 身 波 岩

鉛色の空は次第々々に低くなつて來ます。風がひゆうつとうなつて來るたびに、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。うちよせて來る波は、岩をかみ、小じやりをとばしては、さあつと引いて行きます。

すもとより舟は一そうも出てゐません。い
つも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると
見えて、汽てきの音は少しも聞えません。
冬時の海には、よくこんなことがあります。
こんな時には、

「これが五日もつゞくと、ひぼしだ。」

と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

二 なぎ

空もみどり、

海もみどり、

空につゞく海のみどり、

海につゞく空のみどり、

すみきつて、

かゞみとかゞみ。

沖ものどか、

濱ものどか、

沖へ急ぐ兄の小舟、
濱へ歸る父の小舟、

すれ合つて、

ゑがほとゑがほ。

第六 くりから谷

義平討騎

木曾きそ義仲が都へせめ上ると聞いて、平家は
あわてて討手をさしむけました。大將は平たいらの
維盛これもりで、十万騎を引きつれて、越中えつちゆうの國の礪と

敵

波山なみにぢんを取りました。義仲は五万騎を
引きつれて、これもおなじく礪波山のふも
とにぢんを取りました。
兩方からおしよせて、ぢんの間がわづか三
町ばかりになりました。
其の夜のことです、義仲はひそかにみ方の
者を敵の後へまはらせて、兩方から一度に
どつとときのことゑをあげさせました。

不

向

不意を討たれた
 平家方は、上を下への
 大きわぎ、弓を取つた
 者は矢を取らず、矢を取つ
 た者は弓を取らず、人の馬
 には自分が乗り、自分の馬
 には人が乗り、後向に乗る
 者もあれば、一匹の馬に二



國六

暗

命 埋 深

人乗る者もあります。暗さは暗し、道はなし、
 平家方にはにげ場がなく、後のくりから谷
 へ、なだれをうつて落ちました。
 親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば
 兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、かさ
 なりかさなつて、ずるぶん深いくりから谷
 が、平家の人馬で埋まりました。
 大將維盛は命からぐかが加賀の國へにげま

した。

第七 霜

今朝は大そう寒い。

屋根の上に霜がまつ白だ。

庭の菊も白い花びらに赤みがさして来た、

霜にあたつたからだらう。

うめもどきの實がいつもより目立って見

える。

今朝
霜
菊

元

ひよどりは元気な鳥だ。こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴いてゐる。

第八 虎と蟻

大きな虎とらが山おくて、

「どうも分らないのは、あの弱い人間がわれわれの仲間を生けどりにすることだ。」とひとりごとを言ひました。其の時

弱

笑

「あは、」

と笑ふものがありました。虎が見まはしました。だが、だれも居ません。

「だれだい、今笑つたのは。」

「私ありです。蟻です。」

なるほど、ごまつぶ程の蟻が一匹虎を見上げてゐます。

「何で笑つた。」

「だつて分り切つた事でせう。人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。私どもだつて、大せいしてかゝれば、あなた方に負けません。」



食鼻

虎はおこつて、蟻をふみつぶさうとしました。蟻は虎の指のまたからくづつて、仲間の者にあひづをしました。さあ大へん、何千匹か何萬匹か、數かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。さうして虎の目、鼻、耳、口、所きはらず食ひつきました、頭のでつぺんから尾のさきまで、からだ中すき間もなく。

虎はうん／＼うなつて、かけまはるより外、どうすることも出來ません。とう／＼弱つて、蟻にあやまつたと言ひます。

第九 町ノ朝

一番汽車ニ乗ラウトイフノテ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。町ハマダヒツソリトシテ、ネムツテキタ。其所此所ニニハトリノコエガ聞エタ。

マツ先ニ出アツタノハ牛乳配達ギウニウハイタツデ、車ノ音
ヲ高クサセテ、ハシツテ行ツタ。橋ノ夕モト
ニ人力車ガ一ダイアツテ、車夫ガ

ダンナ、マヱリマセウ。

ト言ツタ。

東ガ白ンデ、屋根ノ霜ガ見エルヤウニナツ
タ。カラノ荷車ニヲヒイテ行クノハ、八百屋ヤ
サカナ屋デ、買出シニ行クノラシイ。病院キンノ

前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明ケハジメタ。少シ行
クト、呉服屋ゴフクノ小ゾウガ表ヲハイテキタ。

自轉車テンガ後カラ來テ、カケヌケテ行ツタ。豆トウ
腐屋フノラツバヤ煮豆屋ニマメノリンガ小路コウヂノオ
クニ聞エテ來テ、町ハダンくニギヤカニ
ナツテ來タ。

停車場近クニナルト、急ニ人通ガ多クナツ
タ。ベントウヲサゲテ來ル女工ハ、サツキカ

ラ汽テキノ鳴ツテキル工場へ急グノデア
ラウ。

朝日ガパツト西ガハノ家ノガラス戸ニカ
ガヤイタ。

停車場デキツプヲ買ツテキルト、郵便物ヲ
ツンダ車ガキセイヨクカケテ來タ。

第十 弓流し

屋島の合戦に、よしつね義經が小わきにはさんでゐ

合戦

落

た弓を海へ落しました。

弓は潮に引かれて流れて行きます。義經は

馬の上にうつぶしになつて、むちのさきで

それをかきよせようとしています。敵は船の中

から熊手くまでを出して、義經のかぶとに引つか

けようとしています。源氏の者どもは義經をか

ばひながら、

「捨てておしまひなさい。」

源氏

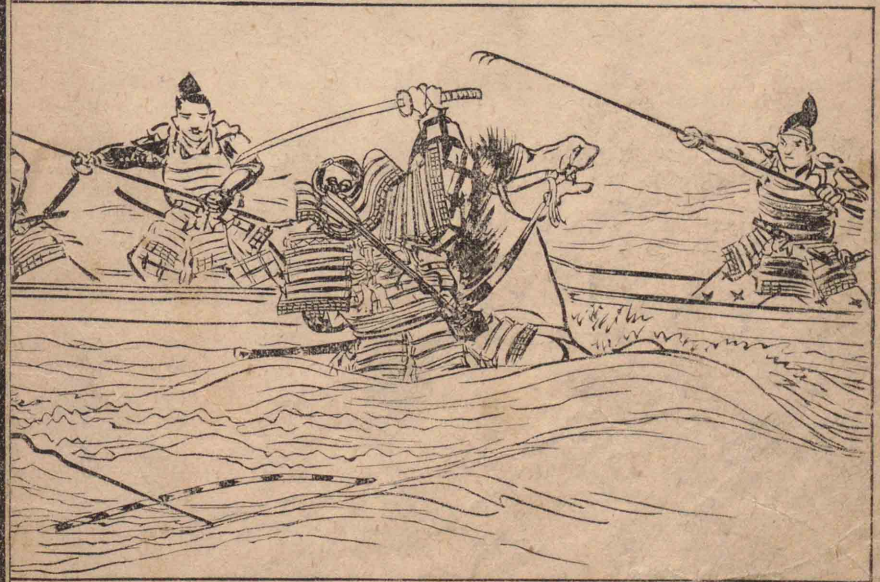
捨

太刀

陸

「お捨てなさい。」
と口々に言ひます。そ
れでも義経は、太刀で
熊手をふせぎくくと
うとう弓を拾ひ上げ
ました。

陸へ上つた時、家來が
「たとひ金銀で作つ



代

惜

た弓でも、御命には
代へられませぬ。
と申しますと、義経は
笑つて、

「いや、弓が惜し
かつたのではない。
叔父ためとも爲朝の弓のや
うな強い弓なら、わ



何時
戦

ざと敵にやつてもよいが、此の弱い弓を
取られて、これが義經の弓だ。などと言は
れては、源氏の名折れになるからだ。
と言つたと申します。義經に此の名を惜し
む心があつたので、何時の戦にも勝つたの
でございませう。

第十一 入營した兄から

國では大雪が降つたさうだね。こ

服

入營
後
出
昨日
兵

つちは國よりよほどあたゝかだ。
洋服は着なれなかつたので、はじ
めは寒いやうに思つたが、もうな
れた。

入營後はじめて此の前の日曜日
に外出をゆるされた。昨日はとな
り村から來てゐる歩兵の音吉君
と二人で町を見物した。お前はな

砲

下

ぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、兵には歩騎砲工航空輜重かうくうしちゆうの六種があつて、私の村から、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。

大工の松藏さんは工兵、力松君は砲兵、正作君は航空兵、役場につとめてゐられた下村さんは騎兵、私

舎

各

を入れて村からは五人も出てゐるが、兵種がちがふと、兵舎のあり場所もちがふので、めつたに一しよになることはない。どの町村からも、歩兵が一番多く出てゐるのに、私の村からは私一人だ。其の代り輜重兵の外は各種の兵が出てゐる。輜重兵にも其の中にだれか

隊

出るだらう。分家の萬藏君などは
小男だから、ひよつとすると輜重
兵特務兵にあたるかも知れない。
お前は今の分では大男になりさ
うだから、砲兵か騎兵になれるだ
らう。からだをちやうぶにして、よ
く學問をべんきやうしなさい。軍
隊へ來ても、學校でなまけてゐた

倍

者は人一倍苦勞をする。其の中に
又くはしい事を知らせよう。

一月二十五日

兄から

千太どの

第十二 笑ひ話

一

歩

「海の上でも歩けさうだ。」
「どうして。」

沈

理

同雷

「左足が沈まない中に右足を出し、右足が沈まない中に左足を出す。なるほど、理くつはさうだ。」

二

月と日と雷が同じ宿屋にとまりました。朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。宿の者にきくと、「もうとうにお立ちになりました。」と言ひます。雷はかんしんして、

鮭

魚

「あ、月日の立つのは早いものだ。自分は夕立にしよう。」

第十三 鮭

叔父サンニ鮭ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。

鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。其ノワケハ、川デ卵カラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ。

淺 産

大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川へ上ツテ來ル。ダンく上流ニサカノボツテ、時ニハセ中ガ出ル程ノ淺イ所マデ上ツテ來ル。コレハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケニ來ルノデアアル。

穴

キレイナ水ガサラく流レテ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中へ卵ヲ産ム。卵ハ小豆程ノ大キサデ、アヅキ

粒

ウスアカイ玉ノヤウニ見エル。一匹デ三四千粒モ産ムトイフコトデアアル。産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセテ、外ノ魚ガソレヲ食ハナイヤウニシテ置ク。ソレカラ海へ歸ルノモアルガ、多クハツカレテ川デ死ンデシマフラシイ。

翌年ノ春ニナツテ、卵カラカへツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海へ行ク。四五年モタツト、大キク

樺太

我 産

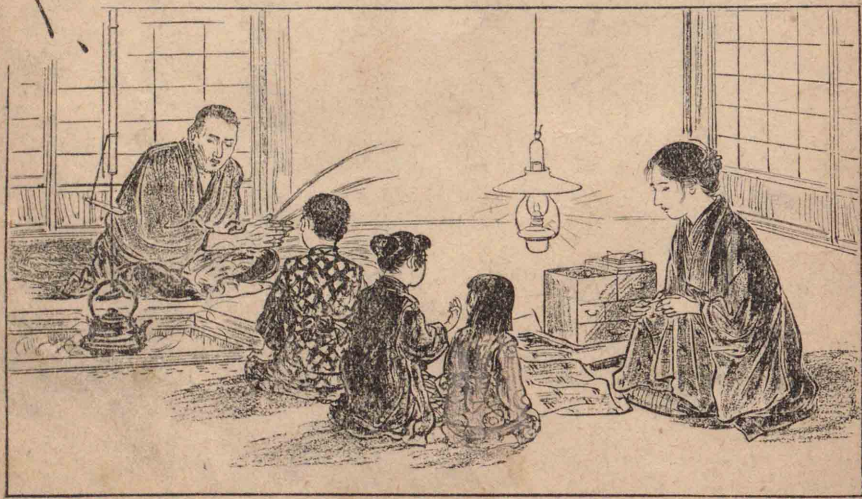
ナツテ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川へ上ツ
 テ來ルガ、フシギニ自分ノ生レタ川へ歸ツ
 テ來ルサウデ、之ヲ鮭ノ里歸トデモ言ツタ
 ラヨカラウ。ト叔父サンガ言ハレタ。
 鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我ガ國デハ樺太ト北海
 道ガオモナ産地ダサウダ。

第十四 冬の夜

ともし火近く

勇 樂

衣きぬぬふ母は
 春の遊の
 樂しさがたる。
 居ならば子どもは
 指を折りつつ、
 日數かぞへて、
 喜び勇む。
 ゐろり火はとろく、



外は吹雪ふゆき。

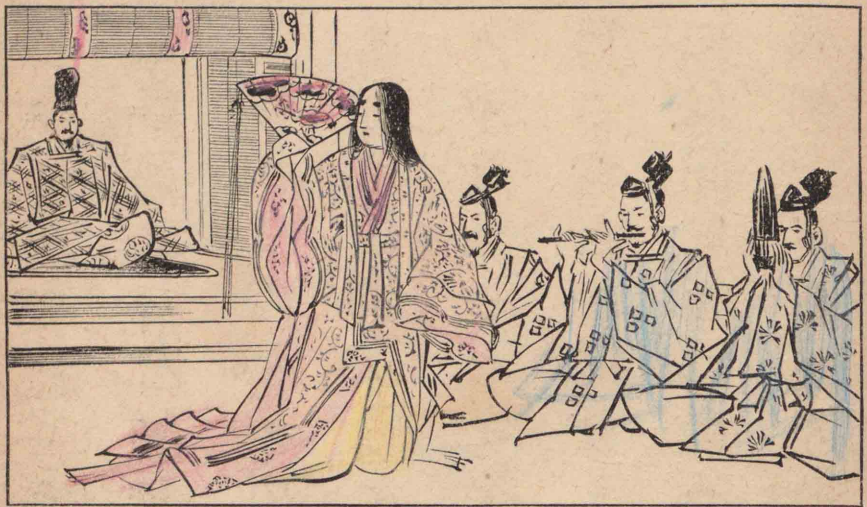
ゐろりのはたに繩なふ父は
すぎしいくさの手がらを語る。
居ならば子どもはねむさ忘れて、
耳をかたむけ、こぶしをにぎる。
ゐろり火はとろく、外は吹雪。

第十五 萬じゆの姫

みまものよりとも源頼朝がつるがをか鶴岡の八幡宮まんぐうへ舞を奉納ほうなふする事

になつて、舞姫ひめをあつめました。十二人いる
うち、十一人まではありましたが、あとの一
人がありません。こまつてゐる所へ、御殿に
仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た
者がありました。頼朝は一目見た上でと、萬
じゆを呼出しましたが、かほも美しく、すが
たも上品に見えましたので、さつそく舞姫
にきめました。萬じゆは當年やうやく十三、

舞姫の中では一番年わかでございました。奉納の当日は、頼朝をはじめ、舞見物の人々が何千人ともなくあつまりました。一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。此の時には頼朝もおもしろくなつて、いつしよに舞を舞ひました。其の五番目の舞姫といふのは、か



の萬じゆの姫であつたのでございます。翌日頼朝は萬じゆを呼出して、
 「さて、此のたびの舞は日本一の出来國はどこ、又親の名は何と申す。はうびはのぞ

みにまかせて取らせるであらう。』
と言ひました。萬じゆはおそるく、
「べつにのぞみはございませんが、唐系からいとの
身代りに立ちたうございます。』
と申しました。之を聞くと、頼朝のかほの色
はさつとかはりました。かはるも道理、これ
には深いわけがあつたのでございます。
頼朝が木曾きそ義仲をせめようとした頃、木曾

の家來手塚てづかの太郎光盛みつもりの娘が頼朝に仕へて
居りましたが、之をさとつて、すぐに義仲の
所へ知らせました。義仲からは折るかへし
返事があつて、すきをねらつて、頼朝の命を
取れ。』と、木曾の家につたはつてゐた大切な
刀を送つてよこしました。

光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひまし
たが、少しもすきがありませんかへつて、は

だみはなさず持つてゐた刀を見つけられてしまひました。頼朝は其の刀に見おぼえがあつたのでございます。さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふ事になつて、石のらうを造つて、それに入れました。唐系といふのは此の女のことです。

唐系には其の時十二になる娘がありまして、これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居り

ましたが、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて、鎌倉かまくらをさして上りました。二人は野をすぎ、山をこえ、なれない道を一月あまりも歩きつゞけて、やうく鎌倉に着きました。

先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、母の命を助けたまへといのり、それから頼朝の御殿へ行つて、うばと二人で御ほうこうをねがつ

たのでございます。かげひなたなくはたらく上に、人の仕事まで引きうけるやうにしましたので、「萬じゆく」と、人々にかはいがられました。

さて萬じゆは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありません。あゝ、母はもう此の世の人ではな

いのかと、力をおとして居りました。

或日のこと、萬じゆが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、下仕の女が来て、「あの門の中へ、はいつてはなりません」と申しました。わけをたづねますと、

「あの中には石のらうがあつて、唐系様がおしこめられて居られます。」

と答へました。之を聞いた萬じゆの喜はど
んなであつたでございませう。

三月二十日、今日はお花見といふので、御殿
は人少でございます。萬じゆは其の夜ひそ
かにうばをつれて、石のらうをたづねまし
た。八幡様の御引合はせか、門の戸は細めに
明いて居りました。うばを門のわきに立た
せて置いて、姫は中にはいりました。月の光

にすかして、あちらこちらさがしますと、松
の一むら立つてゐる中に、石のらうがあり
ました。萬じゆ
がかけよつて、
らうのとびら
に手をかけま
す、「たれか」と、
らうの中から



申しました。萬じゆはとびらのすきから手を入れて、

「おなつかしや、母様。木曾の萬じゆでございます。」

「何、萬じゆ。木曾の萬じゆか。」

と、親子は手を取合つて泣きました。やがてうばをも呼入れて、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。

これから後萬じゆはうばと心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでございます。親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡ししました。二人がたがひに取りついて、うれし泣きに泣いた時には、頼朝をはじめ、居合

はせた者に、だれ一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

頼朝は唐糸をゆるした上に、萬じゆにはたくさんなはうびをあたへましたので、親子は、うばもろとも、喜び勇んで木曾へ歸りました。

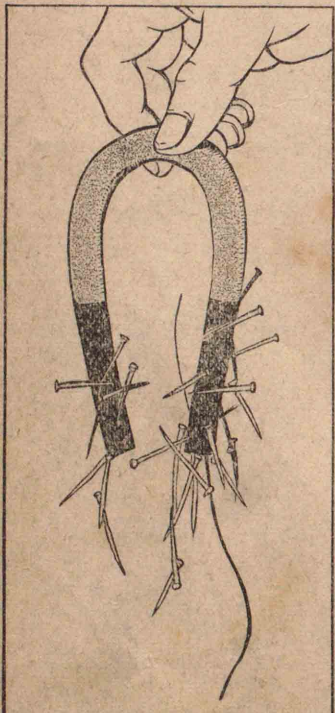
第十六 磁石

磁石

町ノ叔父サンカラ、才年玉ニ大キナ磁石ヲ

鉢 灰

イタ、イタ。鐵ヲ引クカが強イ。昨日ニイサ
ンガ釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手エヲシ
テ、斗夕時、弟ガ釘箱ヲ火鉢ノ中ヘヒツクリ
カヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒハジメ
タ。僕ハ「待テ、待テ。」トイツテ、磁石ヲ持ツテ來
タ。サウシテ灰ノ
中ヲカキマハシ
テ、上ゲテ見ルト、



果 残

果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテ
牛タ。二三返クリカヘシタラ、釘ハ残ラズ取
レテ、其ノ上、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツ
イテ來タ。

第十七 けんやくと義捐

青 義捐

或村に大火事があつて、一村ほとんど丸や
けになつた。其のとなり村の青年たちが見
かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。或物

主

持の所へ行くと、下男がまだ使へる小繩を
捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐ
た。青年たちは之を聞いて、さゝやき合つた。
「こまかな人だ。これではとても義捐はし
てくれまい。」
「さうかも知れない。」
さて主人に火事の話をして、義捐金のこと
をいひ出すと、

言全 途分 豆粉

「それはお氣の毒だ。」

と言つて、たくさん金を出した上に、粉や豆の種を分けて上げててもよいと言つた。

其の歸り途で、青年たちは

「こまかな人だが、出す時には出すね。」

「全くだ。あんな小言を言ふ程だから、此の義捐が出来たのだらう。」

「さうだ、く。」

といひ合つた。

第十八 賀茂川

京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川かも

といひます。京都は長い間の都ですから、冠かむり

をかぶつて太刀をはいたおくげ様方や、き

れいな着物を着て、牛車に乗つたお姫様方

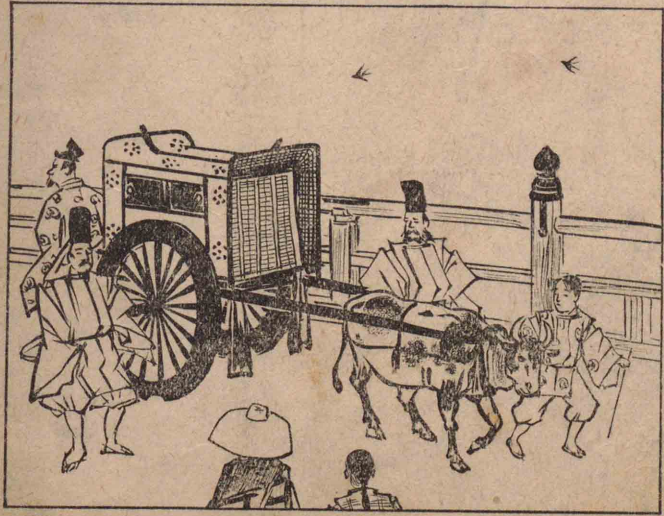
の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつ

したことでございませう。又いくさのあつ

姿 姫

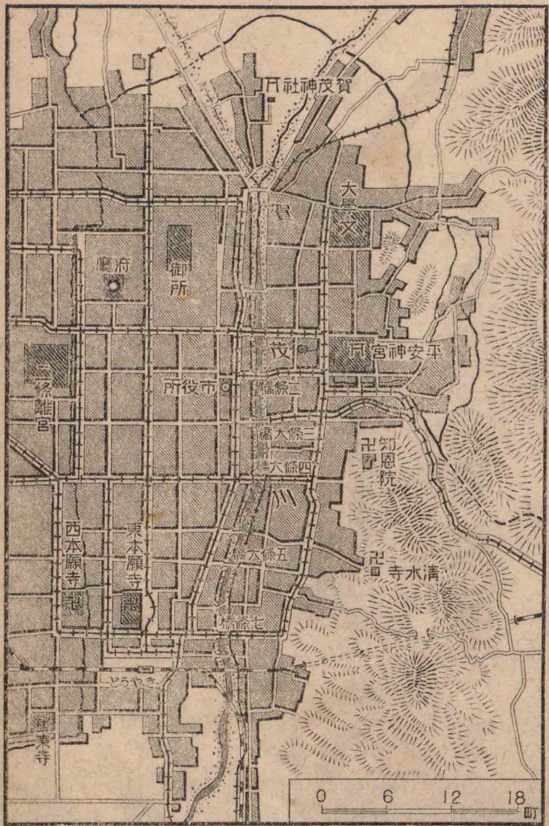
武士

た時には、よろひかぶとの勇ましいなりを
 した武士の刀や、なぎなたの光も、いくたび
 となく此の川の水にう
 つつたこととでございま
 せう。こんな人、こんな姿
 は、とうの昔にきえまし
 たが、川は昔のまゝに清
 く美しく流れてゐます。



清

致



賀茂川には橋がたくさんかけてあります。
 名高いのは三條四條五條の三つの橋でこ
 ざいます。今、三條の大橋に立つて、川下を見
 ると致しま
 せう。川の西
 は水のすぐ
 そばから、す
 き間もなく

家が立ちならんでゐます。東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出ます。此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、青い松の間に、五重の塔ちゆうや大きな寺の屋根が見えます。四條の大橋はすぐ其所に見えます。人通の多いのは此の大橋で、これには電車も通つてゐます。義經辨慶よしつね べんけいの五條の大橋は此

川原

の川下にかゝつてゐるのでございます。又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がかすんで見えます。

染

賀茂川は水が多くないので、船は通りませんが、其の代りに水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。あの美しい友禪染ゆうぜんは、もと此の川べりて出来たのでございます。

第十九 モスリン

「春子、才前ハ着物ヤ帯ノ地ハ何ノ絲デオル

カ知ツテヱマスカ。」

「絹^{キヌ}絲ト木綿^{モモン}絲デス。」

「マダアリマス。」

「麻^{アサ}絲。」

「マダアリマセウ。」

「毛絲デス。」



「サウ、ヨク知ツテヱマシタ。毛絲デオツタ物

ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。」

「ラシヤトフランネル。」

「ソレダケデスカ。」

「セルモサウデセウカ。」

「サウデス。マダアリマセウ。」

「モウ知リマセン。」

「ネエサンガ今又ツテヱル此ノ帯ハ。」

「ソレハモスリンデ、絹デセウ。」

「イ、エ、ヤハリ毛絲デオツタ物デス。ラシヤヤフランネルトチガツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナイノデス。」

「其ノキレイイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。」

「コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、チリメン縮緬ノ友禪イウゼント同ジ

氷湖

デス。コレゴラン、表ダケテ、ウラノ方ハ染メテナイデセウ。」

第二十 氷すべり

二三日ひどく寒かつたので、湖の氷が大へんあつくなつた。一尺ぐらゐもあらう。

今日は日曜日で、おまけに日本晴だ。湖の上は朝からひじやうな人出である。

男の生徒もゐれば、女の生徒もゐる。先生も

西靴

片



るれば、軍人もある。又西洋人もある。みんな氷靴を着けて、思ひくくのすべり方をしてゐる。すべるくく、みんなすべる。片足でおそろしい程早くすべる者もあれば、人の手にすがつて、こは

曲

こはすべる者もある。いろくな曲すべりをやる者もあり、ころんでばかりゐる者もある。はた拾まり送、おにごっこ、何でもなれてしまへば、少しも陸上とかはらない。

第二十一 神風

博多^{はかた}の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。十何萬といふ大軍である。

州

攻守垣

次

四國九州の武士は博多の濱にあつまつた。元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづいて守つた。

我が武士は敵の攻めよせるのを待ちきれず、こつちからおしよせた。敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつた。けれども我が武士は、船の大小などは少しも氣にしなかつた。草野の次郎の

如

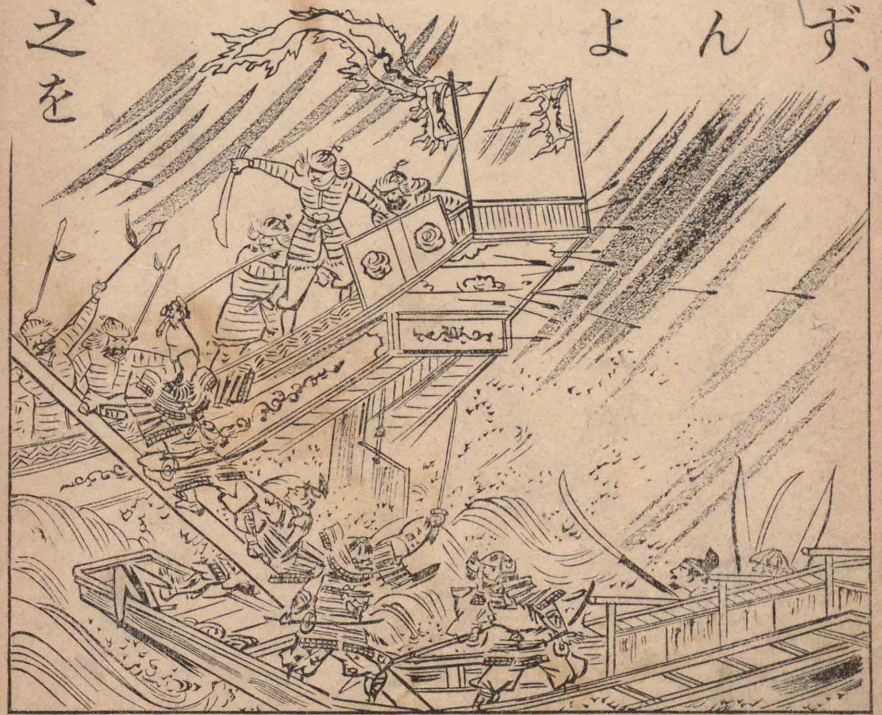
味射

如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。敵は此のいきほひにおそれ、鐵のくさりて船をつなぎ合はせた。まるで大きな島が出来たやうなものである。

此の時河野の通有みちありは、たつた小舟二そうで向つた。敵ははげしく射立てた。味方はばたばたとたふれた。通有も左のかたを射られ

屈

たが、少しも屈せず、
 刀をふるつて進ん
 だ。いよくおしよ
 せたが、敵の船
 は高く上る
 ことが出来な
 い。通有はほば
 しらをたふして、之を



明實難

はしごにして、敵の船へをどりこんだ。味方
 は後からくくとつづいた。さんぐくに切り
 まくつて、其の船の大將を生けどりにして
 引上げた。
 其の後も攻めよせる者がたえないので、敵
 は一先づ沖の方へしりぞいたが、又おしよ
 せて来るのは明らかである。實に我が國に
 とつては、これまでにない大難であつた。

皇

必

暴風雨

おそれ多くもかめ龜山上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。武士といふ武士は必死のかくごでふせいだ。百しやうも一生けんめいで、ひやうらうをはこんだ。全く上下の者が心を一にして、國難にあつたのである。

此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海

數

餘

象

はわきかへつた。敵の船はこつばみぢんにくだけで、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。生きてかへつた者は數へる程しかなかつたといふ。

それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。

第二十二 象

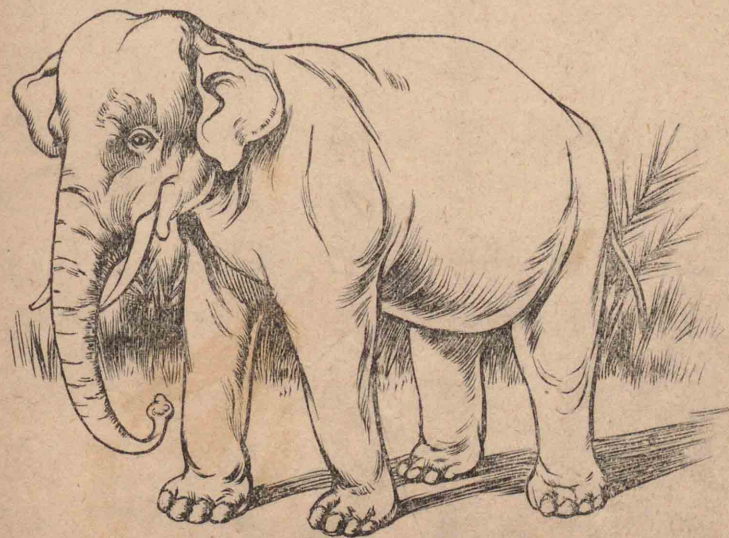
見せ物小屋で象を見た。先づ大きなのにお

由丈

牙

繪切

どろいた。たけは一丈からあつた。自由にう
 ごかすことの出来る
 長い鼻、箕^みのやうな耳、
 長い牙、小さな目、それ
 から太い足、細い尾、一
 切繪で見た通りであ
 った。
 象つかひが乗つてゐ



國六

口 桶

て、口上をのべては、らつばを吹かせたり、こ
 ばんの上へ乗らせたりした。
 象が大きな桶を鼻で頭の上へまき上げる
 と、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつ
 てしやがんだ。象がそれを下して来て地に
 置くと、象つかひがぬつと桶の中で立上つ
 た。みんな手をうつてかつさいした。象の鼻
 は手の用をなすもので、實に力がある。

腕

牙は象つかひの腕よりも太かつた。自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。子どもの手がやつと合つてゐた。象つかひが

此の太い足で、どさりくと歩きます。といふと、長い鼻をぶらくさせて歩き出した。何だか地ひびきでもするやうな気がした。又

守印腹

御らんの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございます。なれますれば、お子どもしゆうのお守も致します。印度の國はいたつてあつうございますので、お子どもしゆうは此の腹の下でお晝ねをなさると申します。といふと、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。すると象は鼻で、其所にあつたうち

顔

はを拾つて、子ども顔をあふぎ出した。此の時、

「大きなお守さんだ。」

誰

と誰かがいつたので、みんなが一度にふき出した。

第二十三 千早城

千早城 足

楠木正成くすのき まさしげが守つた千早城は、けはしい金剛こんがらう

山さん上にはあるが、まはりが一里にも足らず、

賊 城

總勢そうせいわづか千人ばかり。之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、城の四方二三里の間は、人や馬でふさがつた。

投 坂

こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

汲來

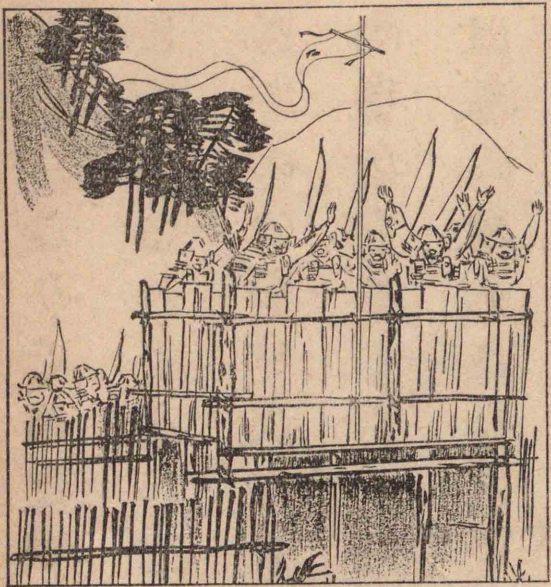
これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかつた。先づ谷川のほとりに三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに来られないやうにした。城中には十分水の用意がしてあつた。二日たつても三日たつて



旗

悪

も汲みに来ない。番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。



正成は此の旗を城門に立てて、さんぐくに賊を悪口させた。賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、正

餘聲

成は高いがけの上から大木を落させた。さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘もころした。此の上はひやうらう攻にしようと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。或朝、夜明頃、城中からうつつて出て、どつとときの聲をあげた。賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」とおしよせた。城兵はさつと引上げ

石

たが、二三十人はふみとどまつた。賊が四方から之を目がけておしよせると、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころされた。ふみとどまつてゐたのは、みんなわらにんぎやう藁人形であつた。賊はうまくはかられたのである。

もう此の上は、しやにむに攻落さうといふので、賊は大きなはしごを作つて、之を城の

堀 我

堀にわたして橋にした。幅が一丈五尺、長さ
が二十丈、其の上を賊が我先に渡つた。今度
こそは千早城もあやふく見えた。すると正
成は、何時の間にも用意して置いたか、たくさ
んなたいまつを出して、之に火をつけて、橋
の上に投げさせた。さうして其の上へ油を
ふりかけさせた。橋はまん中からもえ切れ
て、谷そこへどろりと落ちた。又賊は何千人か

油

傷

死傷した。

賊が千早城一つを持餘してゐると、方々で
官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、
賊は人馬ともにつかれた。百騎にげ、二百騎
にげして、はじめ百萬騎といつた賊も、しま
ひには十萬騎に減じ、前後から官軍にうた
れて、残少になつて退いた。
正成は實にえらい人である。

官

減

退

第二十四 記念の木

村の学校のげんくわんの

向つて右の落葉松は、

わたしの子どもが植ゑたので、

其の子はとうに戦死した。

あの學校がたつた時、

うちの畠にあつたのを

死んだあの子が掘取つて、

かついで行つて植ゑたのだ。

あの子は十二、落葉松は

あの子のせいより低かつた。

それが今では學校の

二階のまどにとぶいてる。

あの子がいくさに行く時に、

學校の前でふりかへり、

「わたしの植ゑた落葉松が

あんなに高くなりました。」

昨日學校で校長に、

あの木の事を話したら、

はじめて聞いた記念の木、

大事にするとおつしやつた。

第二十五 芽

暖

「一雨々々暖になつて、よいあんなばいです。」

とおかあさんが誰かにおつしやつてゐる



芽

時、私は庭へ出ました。雨あがりの庭はぼろつとけむつてゐました。

池のはたへ行つて見ると、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。うちの人みんな知らずに居るから、一つ取つて行つて見せようと思つて、手を出すと、

「義一さん、それはお節供せつくに使ふのですよ。」
といふねえさんの聲がしました。ねえさん

軒

は赤いたすきをかけて、手洗鉢の水をかへてゐました。

なるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。しやうぶ湯を立ててうち中の者がはいった。かしはもちをこしらへていた。こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、しやくやくが赤い芽を出してゐました。

參宮
拜

第二十六 伊勢參宮

一 入營中の兄へ

其の後おさはりもございませんか。おとうさんは昨日分家の叔父さんと、夜汽車で伊勢參宮に立たれました。參拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。うちにも村にも、かは

つた事はありません。

三月十八日

千太

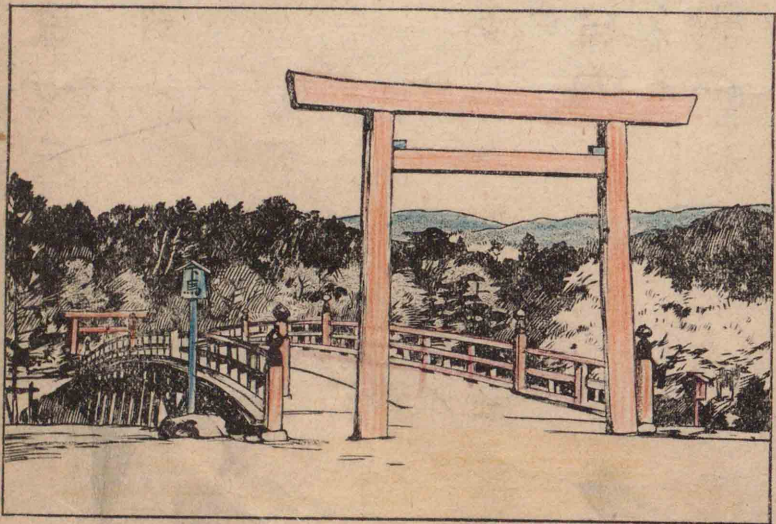
兄上様

二 父から

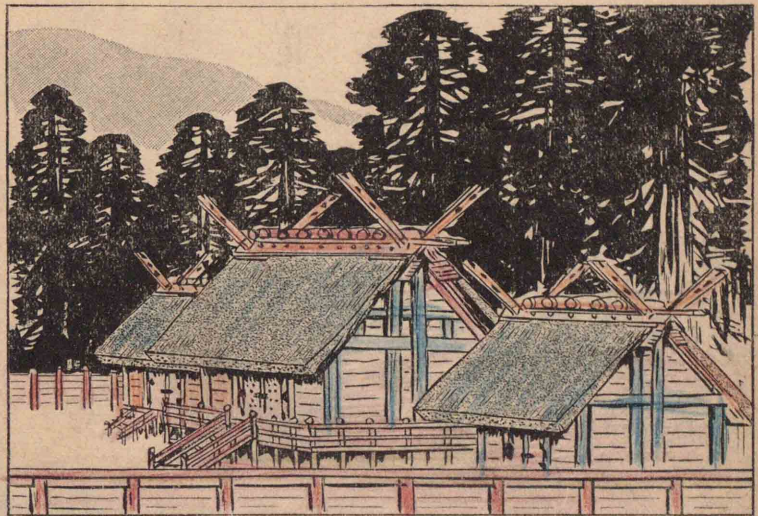
午
外宮
參
老

昨日正午にこ^ちらへ着いて、午後
外宮へ參り、今日内宮へ參つた^う宇
治橋^{ぢはし}を渡つて神苑^{しんゑん}に入り、千年も
たつたかと思ふ老木の下へ行つ

た時には、何となく心持がかはつ
て、一そうあり
がたくかんじ
た。
御門の前で
やうやしく拜
禮してから、神
殿の御もやう



棟



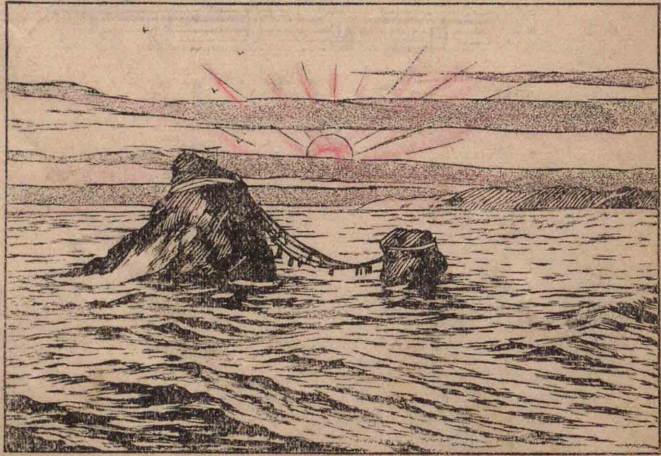
は千木が置いてある。何のかぎり

を拜した。一切
白木造で、お屋
根はかやでふ
いてある。棟に
はかつを木が
ならべてあり、
棟の兩はしに

細貝

もない御神殿を
拜して、まことに
おそれ多い氣が
した。

參拜をすまして
から、二見浦を見
に行つて、おみやげに貝細工を買
つた。こはささないやうにして持つ



て歸る。

夕方京都へ立つ。

三月十九日

千太どの

父から

をはり

國六

昭和七年三月十九日翻刻印刷
昭和七年四月廿五日翻刻發行

尋常小學國語讀本卷六

— 定價金九錢 — は

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

昭和七年三月廿二日
文部省檢査濟

發行所

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社
代表者 石川正作

印刷所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

東京書籍株式會社

三尋
土井

広島大学図書

2000302753

